

わが人生の転機

心に残る

ひと言・人・作品

リレートーク⑥



かつては“芸どころ名古屋”の象徴だった御園座。1896（明治29）年に創業、来年130周年を迎える。2012年御園座会館の建て替え計画を発表し、15年閉館。不況による赤字が続き、債務超過を受けて大幅なリストラに踏み切り、土地建物を売却して事業再生を目指し、18年4月の開場にこぎつけた。多くの関係者の協力を取り付けて再建に奔走し、困難を克服したのが宮崎敏明社長。社員時代からの筋を通し、恩人の言葉に励まされてきたという。宮崎社長に老舗劇場運営の舞台裏、心に刻む言葉を語ってもらった。

聞けば、波乱万丈の半生である。宮崎氏は1971年3月、愛知県知多市で、京都府出身の両親の長男として誕生。現在も同市在住。父親は土地造成など土木関係の会社をやっていて、見合いで見染めた母親を京都から愛知に呼び寄せた。宮崎氏は慎ましい生活の中、両親の愛情に恵まれた。元気な幼少期の思い出を語る。

「学習塾には行きませんでしたね。小学校から帰ると柔道、剣道、空手を教えてくれる総合武道の道場へ。週2、3回通いました。それと書道も習いました。中学では柔道部に入ろうと思いましたが、右肘を骨折、入院したことがあるため断念。足は速かったので陸上部へ。授業は社会と国語が得意でしたね」

柔道、書道はいずれも2段の腕前だが、大学は東京の国士舘大学法学部へ。アルバイトに精を出すのは、学生の常だが、宮崎氏のやり方は徹底している。並のサラリーマンではここまでは働けないだろう。

「昼間はトラックを運転して家具の運搬などをして作業が終わると今度は沼津市へマグロのネギトロを輸送。時間は比較的自由に、少し仮眠して飲まずに働き、築地に帰ると、夜はコンビニでバイト。大学にはあまり真面目に行かなかったのですが、当時の月収は数十万円。多い時には80万円ほどになりましたね」

93年3月に大学を卒業するが、就職を考えたのが4年生の夏。アルバイト収入があり、企業に就職しなくてもいいとも考えたが、両親が働いて4年間仕送りを続けてくれたことに報いなければ、との思いが勝ったという。御園座への

宮崎 敏明 御園座社長



入社は数奇な巡り合わせを感じさせる。

「トラックで働いていると両親に言うと、大学に行く意味がなかったのではないかと問われる。1度愛知県に戻ることにしました。求人は飲食店が多かったが、就職センターのパソコンで宮崎の“み”で情報を検索したら、御幸毛織と御園座が出てきて、知り合いから御園座は（入社が）難しいと聞いてチャレンジし、採用してもらいました。面接でスーツを着るのが嫌で営業だけはしたくないと言ったら老人ホーム、ミソノピアがあると聞き、